特別企画

あと半年で何をすべき？
小学校英語

移行期間中に検討したい研修計画と実践のヒント

小学校の新学習指導要領の全面実施まで、残すところ約半年となった。外国語教育の推進は教員の不安や疑問が最も大きい領域の1つであり、移行期間における最重要課題だと言える。学校現場向けの研修のポイントを整理し、先進的な実践事例を紹介する。

＊本稿の内容は、2019年2月に行った「これからの小学校英語教育施策を考える研究会」（主催：ベネッセコーポレーション）の講演内容を再編集したものです。

研修体制の考え方

研修の目的と位置づけを明らかにして、教員の悩み・不安感の解消を

「高い英語力よりも指導力」を繰り返し伝える

信州大学の酒井英樹教授は、全国各地の小学校で「外国語活動」「外国語」の研修を指導している。残り半年となった移行期間に行う研修のポイントは、2つあるという。

1つは、教員が安心して指導できるように配慮することだ。

「自分の英語力、特に発音に自信がないという現場の先生方の声をよく聞きます。しかし、『外国語活動』『外国語』の指導で求められるのは、子どもが理解できるような、シンプルで分かりやすい英語です。発音はテキストに付属するCDなどで補えますし、教員にはそれほど高度な英語力が求められているわけではないことを、研修で繰り返し伝えましょう」（酒井教授）

もう1つは、新学習指導要領の趣旨を理解して指導力の向上を図ることだ。新学習指導要領では、教科の特質に応じて言語活動を充実させることが求められている。「外国語活動」「外国語」における言語活動の定義は、現行の学習指導要領とは異なっている点に留意する必要があるという。

「現行の学習指導要領では、言語材料の練習も言語活動とされていました。しかし、新学習指導要領での言語活動は『実際に英語を用いて互いの考えや気持ちを伝え合う』活動と定義され、単なる練習とは区別されています。そうした変更点を含め、新学習指導要領の趣旨を適切に理解し、指導に生かす必要があります。文部科学省が作成した『小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック』には、詳しく分かりやすい解説と実践例が紹介されているので、研修でもぜひ活用してください」（酒井教授）

研修項目や到達水準の参考に！「コア・カリキュラム」

目的意識を持って研修を行うことも重要だ。東京学芸大学が文部科学省の委託を受けて作成した「小学校教員研修コア・カリキュラム」には、「外国語」の指導力を高めるための研修項目や到達目標などが体系化されている（**図1**）。同コア・カリキュラムの作成に携わった酒井教授は、そのねらいと活用のヒントをこう話す。

信州大学
学術研究院教育学系
言語教育グループ
教授
酒井英樹
さかい・ひでき

「位置づけや目的があいまいな研修をいくら行っても、効果は上がりません。そこで、『外国語』の指導に必要な知識・技能や英語力、求められる授業研究のあり方を可視化したのが、このコア・カリキュラムです。活用することで、教育委員会や学校、先生方が目線を合わせ、目的意識を持って研修を行いやすくなるでしょう。そうすれば、現場の先生方の悩みや不安が軽減され、研修の質が高まります。このコア・カリキュラム

を基本形として、地域や学校の実態に応じた活用をしてほしいと考えています」

例えば、市区町村の教育委員会では、都道府県の教育委員会が主催する研修の内容がコア・カリキュラムのどの項目に該当するかをチェックすることで、取り上げられていない項目に焦点をあてた研修を企画できる。さらに、同コア・カリキュラムの研修項目は、教員個人のポートフォリオとしても活用可能だ。そうして、できている項目とできていない項目を教員自身が把握することで、各自に応じた研修を選択できる。

今後の研修では、小中連携の強化がより重要になる

研修体系を考える上では、①学習内容の変化、②大学の教員養成課程の変化という２つの時間軸を捉えておきたい。

①学習内容の変化

小学校では、移行期間初年度の2018年度から、３年生で新学習指導要領の「外国語活動」を学んだ子どもが６年生になる2021年度まで、年度ごとに「外国語活動」「外国語」の授業時数や学習内容が変わる。そ

図1　「小学校教員研修コア・カリキュラム」（東京学芸大学作成・抜粋）

	研修項目 ＼ 目的	基礎 児童の特性や発達段階に合わせて授業を行うための英語力・指導力を向上させる	発展 英語力・指導力を向上させ、校内研修や公開授業等の中心的役割を担い、各学校での外国語教育の質の向上に貢献する	推進 英語力・指導力をさらに向上させ、メンターとして後進の指導にあたる
指導に必要な知識・技能	学習指導要領	●	●	
	主教材	●	•	
	子どもの第二言語習得についての知識とその活用	●	•	
	英語での語りかけ方	●	•	
	児童の発話の引き出し方、児童とのやり取りの進め方	●	•	
	文字言語との出合わせ方、読む活動・書く活動への導き方	●	•	
	題材の選定、教材研究	●	•	
	学習到達目標、指導計画（1時間の授業づくり、単元計画・学習指導案）	●	•	
	ＡＬＴ等とのティーム・ティーチングによる指導の在り方	●	•	
	ＩＣＴ等の活用の仕方	●	•	
	学習状況の評価（パフォーマンス評価や学習到達目標の活用を含む）	●	•	
	小・中・高等学校の連携と小学校の役割		●	
	指導計画（年間指導計画・短時間学習）		●	
	英語に関する基本的な知識（音声・語彙・文構造・文法・正書法等）		●	
	第二言語習得に関する基本的な知識		●	
	児童文学（絵本、子ども向けの歌や詩等）		●	
	異文化理解		●	
	児童や学校の多様性への対応	※学校・児童の状況に合わせて適切に扱う		
英語力	授業で扱う主たる英語表現の正しい運用	●	•	•
	発音や強勢・リズム・イントネーションを意識した発話	●	•	•
	板書や提示物における英語の正しい表記	●	•	•
	ＡＬＴ等と授業について打ち合わせをするための表現		●	•
	クラスルーム・イングリッシュを土台にした意味のあるやり取り		●	•
	児童の発話や行動に対する適切な言い直し		●	•
	児童の理解に合わせた適切な言い換え			●
	児童の発話や行動に対する即興的な反応			●
授業研究	授業観察（中学校の授業観察も含む）	●	●	•
	授業公開	●	●	•
	公開授業等の企画・運営			●
	モデルとなる授業			●

※当該の段階において、扱うことが必須とされる研修項目を●、扱うことが推奨される研修項目を • で示している。
＊同大学作成資料を基に編集部で作成。このコア・カリキュラムの全体は、http://www.u-gakugei.ac.jp/~estudy/report/index.html からダウンロード可能。

れに伴い、中学校でも、各年度の変化に対応した指導が求められる上、2021年度には、中学校の新学習指導要領が全面実施される。

「時間軸を見据えた小・中の円滑な接続も研修の重要なテーマとなります。小中連携の強化を図る研修では、小・中の先生方の目線合わせが欠かせません。そこで、小・中両方の新学習指導要領で重視されている言語活動や主体的・対話的で深い学びの観点で互いの授業を見合うことから始め、共通理解を深めていくことが大切です」（酒井教授）

②大学の教員養成課程の変化

2019年度の大学入学者からは、小学校教員養成課程で「外国語の指導法」や「外国語に関する専門的事項」が必修科目となる。そのため、新カリキュラムで学んだ大学生が教員になると、小学校の現場は新任教員や若手教員の中に、旧カリキュラムで学んだ教員と新カリキュラムで学んだ教員が混在することになる。

「若手教員を対象とする研修の内容は、新旧両カリキュラムに対応させるなどの工夫が必要でしょう。文部科学省『英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業』には、小学校教員養成課程のカリキュラムの改訂についても具体的にまとめられているため、研修を工夫する際の参考になります」（酒井教授）

実践事例

子どもが自分の考えを伝え合う 対話的な言語活動を軸とした指導へと改善

岐阜市教育委員会
学校指導課 副主査
鹿嶋成子
かしま・せいこ

いま一度見つめ直したい指導観・評価観

岐阜市では、2004年度に構造改革特別区域制度により小学校３～６年において英語科を実施し[*1]、小中一貫のカリキュラムを開始した。2009年度には教育課程特例校制度による実施に移行し、研究と実践を続けている。そうした一連の取り組みを推進してきた１人が、同市教育委員会の鹿嶋成子副主査だ。

同市では、「言語活動を通して指導する指導過程」と「単元を通して繰り返し指導する指導過程」の実践を最重要課題として位置づけ、従来の指導過程の改善を進めている。その際に、教員が自分の指導観と評価観の両方を見つめ直す必要があると、鹿嶋副主査は語る。

「新学習指導要領では、『互いの考えや気持ちを伝え合う』言語活動がより重視されています。本時で学ばせたいフレーズを先生方が『Repeat after me.』と、子どもに練習させるだけでは言語活動とは言えず、『伝え合う内容を大切にする』指導観が重要になると考えています。そうした指導観の下で行う授業では、子どもが伝えたいと思うことを伝え合う中に、学ばせたい言語材料を挟み、それらを１時間の枠にとらわれず『単元を通して繰り返し指導』しながら、子どもの変化を見取るという評価観への転換が欠かせません。そこで、研修では、チェックリストを用いて指導観を確認したり、実際に体験する場面を取り入れたりして、指導過程の改善を図っています」

「Small Talk」で、伝える内容を重視した活動を実践

「言語活動を通して指導する指導過程」と「単元を通して繰り返し指導する指導過程」を授業で実践する際に、同市が重視している活動が「Small Talk」だ（**図２**）。

「Small Talkは、『表現の定着』と『対話の継続』を目的とする活動です。振り返りを交えながら、子ども同士のやり取りを数回繰り返します。そうした中で、子どもは話したい内容と、それを英語でどのように表現するかを考えます。内容と表現の両方への意識づけができるところが、Small Talkの最大のメリットです」（鹿嶋副主査）

Small Talkを充実させるために、同市が重点を置くポイントは２つある。１つは、活動の前にすべての言語材料を示さないことだ。従来の一般的な言語活動では、教員が事前に言語材料を示した上で、その言語材料を使った対話をするよう指導することが多い。同市が推進するSmall Talkでは、まず教員が自分のことを話した後、子どもたちが話したいこ

＊１ 小学１・２年生は「英語活動」として実施し、２０１５年度から「英語科」を実施。

図2 「Small Talk」の例（テーマ：自己紹介）

＊研修会に参加した教育委員会の先生方が子ども役、鹿嶋先生が先生役となり、実際に行ったSmall Talk の様子。

❶教員と子どもとのやり取り

教員　Hi, everyone. My name is Seiko Kashima. I'm from Gifu city. If you came to Gifu city, you can see the statue of golden Nobunaga. You can see the statue in front of Gifu station. My hobby is playing badminton. Do you like badminton? What sports do you like?

子ども　I like baseball.

教員　Oh, baseball. How long have you played baseball?

子ども　Six years.

教　員　Wow! Six years! I see. When I was ten years old, I started to play badminton. I want to watch the badminton match at the Tokyo Olympics.

❷子ども同士のペアワーク（1回目） ……（略）……

❸振り返り

教員　英語で言えなかった表現はありますか。

子ども　「唐揚げにはまっている」が言えなかった。

教員　「はまっている」とは、どんな状態かな？

子ども　毎日食べたい。

教員　「毎日食べたい」を英語で言うと？

子ども　I want to eat *karaage* everyday.

教員　That's right!　［ＡＬＴに対して］Tommy, how do you say that in English?

ＡＬＴ　I'm in love with *karaage*.

教員　Tommy（ＡＬＴ）のように格好よく言っても、今まで習った表現を使って言ってもいいよ。では、ペアを替えてもう一度やってみよう。Ready go!

❹子ども同士のペアワーク（2回目） ……（略）……

❺振り返り

教員　どのペアも、笑顔で、伝わらないところはジェスチャーを交えながら伝えようとしていましたね。相手の話も一生懸命聞いていました。最初に「唐揚げにはまっている」が言えなかったＡさんも、英語で言えるようになっていたし、周りの人もＡさんの表現を真似して使っていました。

とを自由に話す場面を設ける。どのような表現が使えるか、既習表現を活用できないかを子ども自身に考えさせるねらいがある。

もう１つは、子ども同士のペアワークの間に設定する振り返りだ。ペアワークでは、自分の言いたいことを英語でどう表現すればよいか分からない子どもも多い。そうした表現を学ぶ機会として、振り返りの場面を何度も設けている。

「振り返りでは、正しい英語表現を『教える』のではなく、『子どもと共に考える』ようにしてほしいと、先生方に伝えています。例えば、『唐揚げにはまっている』と言おうとして、『はまっている』の英語表現が分からなかった子どもには、『はまっている』を別の言葉で言い換えられないかと尋ね、既習表現を活用させることが重要です（**図２❸**）。別の表現で言い換えたら、参考としてＡＬＴに英語らしい表現を示してもらってもよいでしょう」（鹿嶋副主査）

さらに、ペアワーク後のまとめの振り返りにもポイントがある（**図２❺**）。

「適切な英語表現が分からなかった子どもが表現できるようになり、周囲の子どもも真似して表現できるようになったことを価値づけて、子どもに伝えることが大切です」（鹿嶋副主査）

小・中の全校が連続性のある評価規準で「話す力」を測定

同市では、新学習指導要領の趣旨を踏まえた統一の指標で評価を行えるように、小・中学校の教員十数人で構成される授業・評価改善委員会がパフォーマンステストを作成している。

「英語の４技能５領域[*2]の中で、まずは『話すこと［やり取り］』の力を客観的に把握することを目指しています。また、小・中の連続性を持たせた評価規準にすることも意識しました。小学生対象のスピーキングテストでは、①内容、②英語の正確さ、③対話の継続の観点から、中学生対象のスピーキングテストでは、①内容、②英語の正確さ、③英語の適切さの観点から評価する予定です」（鹿嶋副主査）

児童・生徒に返却する「SCORE REPORT」には、できたことを伝えるだけではなく、さらに力を伸ばすためのポイントを具体的に示している。

「小学１・２年生向けの『SCORE REPORT』は、学校で見るものと、家庭で保護者と一緒に見るものの２種類を作成しました。手厚いフィードバックを行うとともに、次の指導にも生かす仕組みを考えていくことで、子どもたちの学びをより深めていきたいと考えています」（鹿嶋副主査）

＊２　４技能の「聞くこと」「読むこと」「話すこと」「書くこと」のうち、「話すこと」を「やり取り」と「発表」に分けて５領域とする。